

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。
※不定期で掲載いたします。

安土桃山時代から続く用水を日々管理。将来、土地改良区の中核を期待され、後輩の指導に意欲を見せる土地改良区唯一の電気主任技術者

～鹿妻穴堰土地改良区

越場 紀寿 氏～

岩手県盛岡市

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、^{かつまあなげき}鹿妻穴堰土地改良区に勤務する事業課事業第二係長の^{こえばのりひさ}越場紀寿さん。

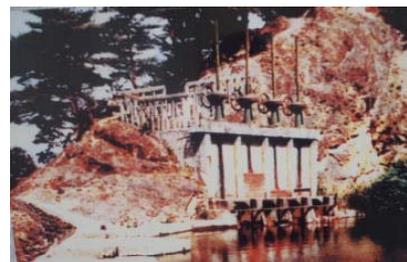
越場さんは平成6年から勤務し今年で23年目。平成28年度から事業第二係長に昇任。施設管理を担う中心人物として、また、土地改良区の中で唯一の電気主任技術者として活躍しています。土地改良区で管理する用排水路が市街地と近接していることの苦労や、やりがい、今後の抱負などについて伺いました。



鹿妻穴堰土地改良区越場さん

<鹿妻穴堰土地改良区と鹿妻穴堰の歴史について>

鹿妻穴堰土地改良区は岩手県盛岡市にあり、盛岡市南部から^{しわぐんやはばちよう}紫波郡矢巾町及び^{しわちよう}紫波町に広がる約4,600haの水田、畑地を受益地とする用排水施設の管理等を行っています。



昭和5年頃の鹿妻穴堰

鹿妻穴堰の歴史は古く、造成されたのは1599年、豊臣秀吉が天下を治めていた頃。今の盛岡市周辺を治めていた南部信直の命を受けた^{なんぶのぶなお}鉦山師、^{かまつだじんろく}鎌津田甚六が盛岡市西部を流れる^{しずくいしがわ}雫石川のせり出した岩山に、長さ六間(約12m)、幅一間(約2m)の穴堰(穴堰：堰を設けなくて岩に穴をあけ、自然取水を行う取水施設。)を開削したことにはじまります。当時の日本は金が多く産出されていて、鉦山の^{ずいどう}隧道を掘る技術水準が高く、ここでもその技術が発揮されました。

この穴堰の開削により、奥羽山脈と北上川、雫石川に囲まれた本地域(直近の北

上川よりも25mも高い地域)が潤され、南部藩内きっての良質米産地として新田開発が進められました。現在は、ひとめぼれやヒメノモチ(餅米)、ユキチカラ(小麦)、キュウリ、トマト、ネギ、リンゴなどが生産され複合経営が図られています。

また、土地改良区は小学生を対象とした鹿妻穴堰頭首工の歴史教育、地域住民・団体と管理を共同で行うアドプト活動、水源涵養林の保護など、幅広い活動を展開しています。

1. 水管理と施設管理における経験

越場さんの業務は施設の維持管理全般。かんがい期は水管理のため、毎日管理水路を巡回。非かんがい期は施設点検、補修工事に係る設計、工事の施工管理。様々な業務を一手に担っています。「天候や農作業の時期によって分水量を見極めるために、毎日現場を巡回しながら分水ゲート調整を行っています。」と越場さん。



揚水機場でポンプ開度操作をする越場さん

これまでの経験で、苦労したことを尋ねると「渴水で番水を余儀なくされた時が一番辛かった。『水がこない。』と受益者からの電話連絡があり、すぐ現場に行くが、どうしようもない状況。番水に協力してもらうしかなかった。ようやく田畑に水が行き届いた時、受益者から『お陰さまで枯れずにすんだよ。ありがとう。』と声を掛けられました。その時は嬉しかったし、やりがいを感じました。最近大変だったことは、平成25年8月9日の大雨の時。200年に1度といわれる降雨量でした。まず取水源である鹿妻穴堰頭首工に行き、ゲートを閉じる操作を行いました。作業を終え、土地改良区事務所へ帰ろうと頭首工を出たら、すぐ近くで土砂崩れが起きていて土砂が道路を覆っていて、車で帰ることを断念。徒歩で土砂を乗り越え、別の車に迎えに来てもらい事務所へ戻りました。トラブルはありますが、施設を管理する責任は果たさなければならぬと思っています。」と語る顔は、頼もしい表情でした。

2. 鹿妻穴堰頭首工の歴史教育(小学校社会科副読本)、施設見学

越場さんに施設見学を行っているか伺うと、「鹿妻穴堰のことは、小学校四年生の社会科副読本に地域農業と併せて12ページ程掲載されているので、岩手県内の小学

生は鹿妻穴堰の歴史を学習するんですよ。関連して県内小学校からの施設見学の依頼が多く、毎年平均して30校延べ2,000人以上の小学生が訪れます。施設見学では私も説明しますが、お礼の手紙をいただくと、とても嬉しいです。現在の農業が築き上げられたのは、先人達が水を引く功績を残してくれたからだと思っており、小学生や親御さん、また次の世代にこの財産を残すことが使命だと思っています。」と語ってくれました。



小学生による鹿妻穴堰頭首工見学

3. 非農家も含めた「アドプト」による維持管理活動

当地域は県内屈指の都市化・混住化の進展地域であり、非農家が多い地域で施設の維持管理が難しくなるなどの問題が予想されていました。



アドプトによる花壇整備

「土地改良区の維持管理負担について悩んでいたところ岩手県からの薦めもあり、非農家を含めた団体に維持管理活動を行う「アドプト」に取り組みこととなりました。例えば、平成6年から盛岡市立太田小学校等の協力で、鹿妻穴堰頭首工下流の水辺公園の花壇整備や、鹿妻本堰での草刈を続けています。自分達が維持管理に関わった施設が憩いの場としてきれいになったり、また、水路周辺の景観が保たれていたりした成果が感じられると、地域の財産として農業用施設を大切にしたい気持ちや、非農家も含めた関わりは今後も続けたいと考えています。」と越場さん。

同席していただいた中村浩之事業課長からは「維持管理業務は自分たちで行っていかねばならないという使命感で努力してきたが、様々な分野における活動に取り組んだ結果、地域住民との連携が構築され、自分たちの存在・役割を理解してもらえるようになったと思う。これからもこうした活動が広がっていけば良いなと思っています。」と、非農家との連携が広がっていくことに期待されていました。

4. 水源保護のための水源涵養林を育成・保護

土地改良区では雫石川の水源を保護するため、土地改良区が所有する山林で水源涵養林の育成・保護を行っている。関連して土地改良区管内の小学生を対象に植樹体験や枝打ち体験を実施。「水源涵養林の役割」や「水がもたらす恩恵により農業が成り立っていること」を学ぶ場として毎年開催し、今年度は58名の参加があったとのこと。

「最初は杉の木の価値が高かったので、維持管理費の補填として山林を購入したようですが、今は水源地保護の観点から山林を維持しています。親子による枝打ち体験は、親御さんも初めてという方も多く、山林を維持する必要性を深く認識していただいています。」と活動を紹介していただきました。



小学生による枝打ち体験の様子

5. 職場の上司から



上司の中村事業課長(左)と越場さん(右) 上司である中村浩之事業課長に越場さんについて伺ったところ、「越場さんは土地改良区の中で施設管理の中心人物として、また、土地改良区唯一の電気主任技術者として重要な役割を担っています。今年から係長として初めて部下をもち、指導も頑張ってくれています。現場経験を積み重ねているので、越場さんは中堅として非常に期待しています。すごいと思うところは、苦情の電話があってもへこたれないこと。淡々と課題解決に向けて業務をこなしているので、頼もしく思います。いずれは土地改良区を引っ張っていく人材になって欲しいし、また、第2の越場となる、後輩の育成も期待しています。」と、誇らしげに語ってくれました。

「土地改良区の維持管理の仕事は知識も必要ですが、直感で判断する場合もあります。そのためには経験の積み重ねが重要。今ようやく判断できる力がついてきたかなと感じているので、後輩にも経験を積ませたい。」と越場さん。

6. 今後の抱負

採用された頃と現在を比べて、地域に変化があるかどうか伺ったところ、「受益者の意識が変わってきていると感じています。世代交代で、子ども世代が土地を継いでも農業が分からない。どこから水を引いているか、なぜ賦課金を払わなければならないのか、土地改良区の役割なども説明しなければならない状況。これまで末端は地元管理でしたが、水が来ないとすぐ土地改良区頼みという意識の人が多くなっているのです、土地改良区の意義などを伝える啓発活動は継続しなければならないと思っています。」

最後に、越場さんに今後の抱負を聞いた。「土地改良区への就職を推薦してくれた叔父や家族の支え、また上司の指導もあり頑張ってきました。今まで自分が経験するばかりでしたが、これからは係長として後輩の指導にも力を入れたいです。また、地域農業の成り立ちとして、鹿妻穴堰の歴史も伝えていきたいと思います。」と、現状をしっかりと把握した上で、土地改良区での自分の役割を熱く語ってくれました。

盛岡、矢巾、紫波地域の農業発展の源として築かれた歴史のある鹿妻穴堰。それを守る鹿妻穴堰土地改良区。日々の水管理・施設管理のみならず、現状の課題を踏まえた土地改良区の取組は、先輩から後輩へ今後も着実に引き継がれ、地域社会へ浸透していくものと思う。



鹿妻穴堰頭首工を背に越場さん(左)と中村課長(右)

【東北農政局農村振興部設計課、農村振興局設計課】